

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370127

研究課題名(和文)中国仏教美術古典様式完成時期としての「則天武后期(655～705)」の確立

研究課題名(英文)A Study on the Buddhist Sculptures in the Period of Empress Wu

## 研究代表者

八木 春生(YAGI, Haruo)

筑波大学・芸術系・教授

研究者番号：90261792

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：唐時代前期において仏像の様式、形式上の急激な進展が認められたのは、則天武后期(690～705年)になってからであった。この時期に初めて写実的な肉体表現を持つ像が多数見られるようになる。そしてその後、中宗、睿宗時期(705～712年)には、さらに進んだ写実性を備えた像が出現した。則天武后と弥勒如来が、当時どの程度まで人々の間で同一視されていたかは不明である。しかし、則天武后の退位あるいは崩御で、仏像に当時の人々の理想とする人体形式を持たせる動きが加速した。そしてこれが、初唐期と盛唐期とを分ける大きな違いであり、インド美術を越えて仏像を人間化したことが、盛唐期の最大の特徴であると言える。

研究成果の概要(英文)：In Tang period, it was during the reign of Empress Wu (690-705) when the rapid development both in style and form of Buddhist sculpture took place and the Buddhist statues began to show realistic representation in physical rendering. Such pursuit of realism in sculpture continued in the succeeding reigns of Emperors Zhongzong and Ruizong (705-712). The rendering of the Buddha's thighs being exposed through the drapery was brought over as a trait of expression along the Indian boom which came to China after the return of Xuanzang and Wang Xuanze. This type of expression became the foundation both in style and form of the Buddhist sculpture of Emperor Zhongzong and Ruizong times. The realistic representation of Buddhist statues was earnestly pursued to its far most end after the Empress Wu's reign. This human-like representation of Buddha image is the most outstanding and unique characteristic of the Buddhist art of the High Tang period and a clear separation from the Indian art.

研究分野：中国仏教美術史

キーワード：則天武后期仏教造像 初唐仏教造像 盛唐仏教造像 敦煌莫高窟唐前期造像 龍門石窟唐前期造像 西  
安宝慶寺塔造像龕 山東唐前期造像 天龍山石窟前期造像

## 1. 研究開始当初の背景

煬帝の高句麗遠征失敗が引き金となり、各地で起きた大規模な反乱の結果、隋朝は618年に滅亡した。初代皇帝である文帝が始めた仏教治国政策によってめざましい復興を遂げた仏教美術だが、30年に足らない期間では、新たに創出された様式、形式が、全国規模の統一なものとなるに至らなかった。現在中国各地で、唐時代の類似した造像を多数見るような印象が確かにあるものの、曖昧なもので、それが「統一仏教美術様式」と呼び得るものなのか、またそうであれば、いつどのようにそれが形成されたかについては明らかにされていない。

李淵により618年に建国された唐では、907年までのほぼ300年間の長きにわたり仏教が隆盛を極め、とくに安史の乱(655)以前は、仏教美術の「古典様式、形式」が確立し、南北朝、隋時代とは一線を画する高水準の作品が多数制作された。李氏が自ら老子の子孫であると称し道教支持政策を採ったこともあって、唐時代初期、武徳年間(618-626)頃は、仏教美術作品がさほど多くは造られなかったと考えられる。しかし7世紀中頃になると貞観15年(641)に龍門石窟賓陽南洞の造営が再開され、貞観16年(642)には敦煌莫高窟第220窟が開かれるなど、仏教造像活動は再び活気を呈し始める。ただしこれら2窟の造像間には、直接的な繋がりを指摘し得ない。

中国仏教美術の頂点である唐時代の作品が備える「古典様式」およびそれを具現するための形式とは、具体的にいかなるもので、またそれを規範に各地で造像活動がなされる統一なものであったかどうかは、極めて重要な問題である。中国仏教美術の完成としての唐代美術を理解する上で、果たして統一様式、形式なるものが存在したのであるかという疑問も含め、考察を進めていくことは不可欠であると思われる。

自らを弥勒菩薩の生まれ変わりとし、「道先仏後」という唐朝の席次を「仏先道後」とした則天武后時期(690~705)、つまり初唐時期(618~712)の末に、仏教美術の大きな変革が起きたことは十分に考えられる。当然この時期の仏教美術研究は、首都西安とともに則天武后が神都として事実上の首都とした洛陽の作品を中心に進められるべきである。しかし現在、西安のみならずその周辺でもこの時期の遺例は極端に少なく、また銘文を持つ像がほとんど無い状況にある。さらに頭部だけあるいは身体だけといった像が多数のため、隋および盛唐造像との区別がつきにくい。これらのことから西安初唐仏教美術の様相を明らかにできず、初唐美術の典型様式、形式がいかなるものであったかをはっきりとは示すことができない。

初唐窟とされる石窟を多数有する敦煌莫高窟では、造営当時から壁画制作に重点が置か

れていたと思われ、また現在塑像の多くが清代の補修を受け、原型を留めていない。そこでおびただしい数の石窟が造営された龍門石窟を主たる対象として、これまで造像の研究が進められてきた。しかし注意すべきは、この時期、龍門石窟が造営された洛陽以外の多くの地域でも、規模は異なるものの造像活動は盛んであり、またそれらに明らかな龍門石窟造像様式、形式の影響が認められるわけではないことである。そのため龍門石窟研究のみで初唐仏教造像を理解することは不可能であり、いくつかの地域の造像を比較し総合することが、西安初唐様式、形式再現の一助となる。さらにそれが統一様式と呼び得る「古典様式」の成立時期の問題を考察する基礎になる。

## 2. 研究の目的

則天武后期(690~705)における西安仏教美術を中心とする中国仏教美術様相を明らかにし、則天武后期の仏教美術の中国仏教美術史での位置づけをするとともに、統一的な様式や形式出現の時期を特定する。

## 3. 研究の方法

河北省北呉庄仏像埋蔵坑、河北省博物院、河南省洛陽龍門石窟、山東省済南神通寺石窟、済南市県西巷開元寺跡、青州雲門山石窟、駝山石窟、東平県理明窟摩崖、山東省博物館、山西省太原天龍山石窟、忻州市静楽県浄居寺石窟、高平県羊頭石窟、四川省博物院、四川省広元皇沢寺石窟、千仏崖、梓潼県臥龍山、綿陽市碧水寺摩崖、巴中地区西龕、南龕、北龕、水寧寺摩崖、上海博物院などにおける現地調査と資料収集、また中国研究者たちとの交流による情報交換。

## 4. 研究成果

本研究では、則天武后期(690-705)において仏教美術の最高潮を向かえ、古典様式、形式と称すべき統一的な様式、形式が西安で成立し、各地に伝えられたことを明らかにしようという意図を持って始められた。西安のその時期の遺品が少ないことから、河南地方龍門石窟、山東地方雲門山石窟、駝山石窟、山西地方天龍山石窟、四川地方広元石窟皇澤寺の石窟以外に河北地方北呉庄仏像埋蔵坑や山東地方県西巷開元寺跡出土の造像などを対象に、それらの編年を中心としながら、仏教美術作品の様式、形式変遷に関する研究をおこなった。そしてその結果を比較することで、則天武后期の中国仏教美術の様相を明らかにしようとした。しかし、研究の結果、則天武后期に、確かに大きな変革が起きたものの、仏教美術が最高水準に達するのは、則天武后期終了後の中宗、睿宗時期(705-712)であり、その時期写実的な造形表現が完成す

る同時に、各地で類似した造像が見られるようになったことが明らかになった。

則天武后期には、例えば敦煌莫高窟第 220 窟などに見られる大画面の西方浄土变相図のような絵画における浄土表現や、山西省博物館蔵の天授 3 年（692）銘大雲寺涅槃碑像中の如来坐像などの素晴らしい作品が、各地で造り出された。だがどの地方の作品もいまだ強い地域性を有し、それぞれの地域で自立的な展開の上に造り出されたものであったと考えられる。龍門石窟を含め多くの地方、地域では、その時期西安地方からの影響を受容したか、積極的にそのすべてを模倣することはなかった。隋前期（600 年頃）に華北地方の東部と西部で明らかに形式が異なるものの、イメージ上で統一感が出現したのとは異なり、唐時代前期（618～755）の西方浄土变相図や造像は、統一的な様式、形式の形成という面において、それらに及ばないと評価される。このような状況にあって、天龍山石窟第 6 窟東壁（710 年頃）および第 21 窟の東壁如来倚坐像（710 年代前半）は、注目に値する。現在どちらも頭部を欠損しているが、第 6 窟像は、本来第 21 窟如来坐像と極めて類似する頭部を有していた。如来倚坐像は袈裟を偏袒右肩に着け、柔らかな胸の筋肉を覗かせ、下半身は袈裟が貼りつき椅子に押しつけられた太腿の形は露で、内側に少し窄めて両脚を垂下させている。身体に肉の重みを感じられ、「実在性」を獲得したと点で、それ以前とは区別すべき像である。そしてまた、山東省済南長清県神宝寺出土の四面像中の如来倚坐像や如来坐像（710 年代前半）が、これらとほぼ同じ形式を備えていた。これほど類似した造像が、太行山脈を挟んで山東地方と山西地方にほぼ同時期に彫り出されたことは、驚くべきである。またそれ以外でも西安静法寺出土鉄製如来倚坐像、敦煌莫高窟第 66 窟など、関連する像が、いくつも存在し、ひとつのグループを形成している。敦煌莫高窟の場合、この時期の塑像、壁画ともに西安からの強い影響により造られたことが知られているので、類例は少ないが、これらは西安起源の流行形式であったと考えられる。

しかし西安宝慶寺塔造像群中の如来坐像（703-704）のほとんどは、太腿の形を厚い袈裟で覆い隠し、胸の筋肉表現に必ずしも関心が払われてはいない。太腿を露にすると同時に胸の柔らかな筋肉表現を備えた像は、西安を中心として 703 年頃にはまたあまり流行していなかったと思われる。西安宝慶寺塔造像と類似する像は、四川地方や河北、山西地方でも見つけられ、それぞれは類似するものの、天龍山石窟第 6 窟および第 21 窟像に代表されるグループの像ほど互いに近い形式を備えてはいない。天龍山石窟第 6 窟および第 21 窟の造営時期は、則天武后期終了後、700 年代後半から 710 年代前半にかけてであり、その時期に中国仏教美術史上もっとも高い水準の写実的な人体表現が獲得さ

れた。とくに倚坐像は、細部まで類似する形式の像が各地で造られた。

中国各地で盛んに造像活動がなされた則天武后期には、西安からの影響があったとしてもそれぞれの地方で独自性を強める方向に力点が置かれていた。だが 705 年の則天武后退位後にその勢いは削がれ、結果として則天武后期の勢いがある程度継続し、その時期もっとも優れていると考えられるようになった西安様式、形式が、各地で採用されるようになったものと思われる。それゆえ則天武后期は初唐時期に属し、盛唐は則天武后退位以後の時期としてよい。

その開始時期が中宗および睿宗時期（705-712）であったか、玄宗即位（712）以降であったのかは簡単には決められない。だが敦煌莫高窟の西方浄土变相図にしても、天龍山石窟第 6 窟、第 21 窟などの如来倚坐像にしても、おそらく手本となる作品が西安に存在していた。そうであれば、例え部分であっても西安からの情報を忠実にコピーすることこそ、真のリアリティーあるいは実在性の獲得であるとするメンタリティーが存在し、それと技術の急激な発展こそが盛唐時期の重要な特徴であり、中宗および睿宗時期をもって盛唐時期開始と見做す蓋然性が高いと結論される。

彫像の場合、これほどまでの写実性を備えた像の流行は、しかし長続きしなかった。720 年代に入ると、それらとは異なるブロック状の上半身の如来坐像が出現し、また肥満傾向を示す像や、身体と比べ膝張りが大きい如来坐像などが造り始められた。洛陽から出土し、現在洛陽の社会科学院考古隊が所蔵している菩提瑞像（710 年代中頃）などにすでに部分的に認められる、誇張された肉体表現をさらに進行させた像が造られ、山西省博物院に所蔵される五台县仏光寺から出土した天宝 11 年（752）のような完成した如来坐像を彫り出した地域と同時に、像の定型化を起こす地域も認められるようになる。

また倚坐像の作例は減少傾向を示し、それが造られても上半身が扁平で、両脚も細くなり、大きな様式、形式上の変化を示している。これを要するに、8 世紀初頭に如来像の肉体表現についての共通の理解が進み、類似した様式、形式を備えた造像が各地で出現したものの、すぐにそれとは異なるいくつかの様式、形式に取って代わられた。「古典様式」と呼び得る様式およびそれを具現する形式を備えた像の出現後、今度は一転してそれを崩す方向に向かったと考えられる。

今後は、河北地方の白玉像や、甘粛省の炳靈寺石窟などに見られる甘粛地方の造像以外にも、朝鮮半島や日本に見られる造像を用いて、盛唐時代に出現した造像の特質を考察することで、中国仏教美術終焉までの最後の道のりについて考察を続けていきたいと考える。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計 11 件)

八木春生、関由龍門石窟南端地区諸窟編年、査読有、石窟寺研究、第 6 輯、2016、325-347

八木春生、龍門石窟東山諸窟に見られる西方浄土表現について、査読無、泉屋博古館紀要、第 31 巻、2015、47-71、

八木春生、邢寨地区出土の白陶仏龕について、査読無、陶説、751 号、2015、32-35

八木春生、西安宝慶寺塔石像龕と同時期の他地域造像について、査読有、仏教芸術、第 341 号、2015、28-59

八木春生、山東地方の唐前期造像に関する一考察、査読有、芸術研究報、第 35、2015、13-24

小澤正人、河北省南宮市後底閣遺跡出土唐代如来座像の特質とその背景、査読無、成城文芸、230 号、2015、40-68

八木春生、龍門石窟第 1280 窟(奉先寺)の再評価、査読有、中国考古学、第 14 号、2014、165-191

八木春生、龍門石窟敬善寺洞地区造像に関する一考察、査読無、泉屋博古館紀要、第 30 巻、2014、27-51

八木春生、敦煌莫高窟唐前期諸窟における西方浄土变相図の展開、査読有、仏教芸術、第 335 号、2014、9-37

⑩八木春生、広元皇澤寺初唐造像考、査読有、中国国家美術、第 17 号、2013、148-157

八木春生、龍門石窟賓陽南洞の初唐造像に関する一考察、査読有、芸術研究報、第 33、2013、13-24

### 〔学会発表〕(計 4 件)

八木春生、鄴城およびその付近における北齊時代の仏教造像の特色、2015 年度日本中国考古学会全国大会、成城大学(東京都世田谷区)、2015 年 1 月 19 日

八木春生、敦煌莫高窟唐代西方浄土变相図的展開、敦煌莫高窟研究国際学術討論会、敦煌研究院(敦煌 中国)、2014 年 8 月 17 日

八木春生、龍門石窟第 1280 窟(奉先寺)の再評価、2013 年度日本中国考古学会全国大会、駒沢大学(東京都世田谷区)、2013 年 12 月 14 日

八木春生、敦煌莫高窟的西方浄土变相図、敦煌唐代経変研究学術討論会、敦煌研究院(敦煌 中国)、2013 年 10 月 28 日

### 〔図書〕(計 1 件)

八木春生他、天龍山石窟唐代窟の編年研究、隋唐仏教社会の基層構造の研究、明治大学石刻文物研究所・汲古書院、2015、354(136-173)

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

八木 春生(YAGI, Haruo)

筑波大学・芸術系・教授

研究者番号：90261792

### (2)研究分担者

小澤 正人(OZAWA, Masahito)

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：00257205